

山梨県内の中学生 1396 名の日本住血吸虫症についての 認知度調査結果に関する考察

Investigative Study of Awareness and Knowledge about Schistosomiasis Japonica
on 1395 Students of Four Junior High Schools in Yamanashi Prefecture

草柳愛子^{1,2,3)}、山口貴也¹⁾、畑 伸秀⁴⁾、川角 浩⁵⁾、
山口博伸⁶⁾、安川明夫^{3,7)}、太田伸生⁸⁾

Aiko KUSAYANAGI^{1,2,3)}, Takaya YAMAGUCHI¹⁾, Nobuhide HATA⁴⁾, Koh KAWASUMI⁵⁾,
Hironobu YAMAGUCHI⁶⁾, Akio YASUKAWA^{3,7)}, Nobuo OHTA⁸⁾

1) 山口醫院 2) NPO 法人ウェルネスを育む会 3) (一社) 林屋生命科学研究所
4) 東海学院大学 5) 日本獣生命科学大学 6) 駿河台大学 7) 西荻動物病院・上石神井動物病院
8) 東京医科歯科大学・鈴鹿医療科学大学

日本住血吸虫症（以下本症と省略）は、山梨県甲府市周辺、広島県片山地区（現福山市）、福岡県、佐賀県の筑後川流域、静岡県富士川下流域東方、茨城県、千葉県の小櫃川下流域、利根川畔及び印旛沼周辺、埼玉県の中川流域、荒川流域の東京都の一部で猛威を振った寄生虫性疾患であるが、1978 年に山梨県内での発症を最後に、その後の発生は認められていない。しかしながら、海外で感染し、帰国後に発症した例が散聞される。今回演者らは、山梨県内の旧流行地域内に在学する中学 1～3 年生 1,336 名及び同県内の非流行地の中学校に在学する 60 名、総数 1396 名を対象として、本症に関する中学生の知識・意識等の認知度調査を実施した所、興味ある知見を得たので、その一部概要を報告する。

目的

1. 本調査を実施する事により、本症に関する知識と意識の現状を把握する事。
2. 本症が既に終息から 20 年以上、最後の発症から 40 年以上が経過している事を国内外に発信する一方で、引き続き継続教育の必要性を呼び掛け、本症克服の経験を基にした、感染症全般の防疫に関する意識を向上し、拡大する事。

調査対象と調査方法

山梨県内の私立中学校 4 校と公立中学校 1 校の計 5 校において旧流行地域内に在学する中学 1～3 年生 1,336 名及び県内の非流行地の中学に在籍する 60 名を対象として、本症に関する知識と意識等の認知度についての調査をアンケート形式で行った。本調査に協力を得た中学校 5 校の 1396 人の解答を集計し、旧流行地域と非流行地域の結果を比較した。尚、本調査研究は（一社）比較統合医療学会の理事会および総会において承認後、同学会平成 28 年度一般会計予備予算により実施した。

結果

1. 本症の病原体が何か？という設問に対しては、最も濃厚流行地であった昭和町の公立中学校（12.2%）で高い正答率を認められた。
2. 本症の中間宿主は何か？という設問に対して、最も濃厚流行地であった昭和町の公立中学校（15.8%）で高い正答率を認められたが、非流行地区の私立中学校（11.6%）がこれに次いで高い正答率を示した。
3. 本症の感染部位はどこか？という設問に対しては、非流行地区の私立中学校の正答率（15.0%）と最も高かった。
4. 本症の発生が多く見られた地域はどこか？につ

いての設問に対して、非流行地域の私立中学校の正答率（28.8%）が最も高かった。

5. 本症が人以外の動物に感染しますか？という設問に対しても、非流行地域にある私立中学校の正答率（28.3%）が最も高かった。

考察

旧流行地域内中学校のアンケートの設問事項に対する解答から、山梨県での本症に関する歴史については、ある程度の教育がなされている事が考えられた。本症の認知度は調査前の予想と比較して高かった。私立中学校では、理科の授業等で既に教育時間を設けている事が分かっている。これは、非流行地域の私立中学校でも同様の傾向にあるものと思われる。昭和町の公立中学校では、本症に関する歴史について、ある程度の教育がなされている。特に理科や保健体育または家庭科の授業、春夏や冬などの長期休暇の前に、本症に対する授業または講話などを実施していると考えられる。これらの実施状況については、今後更に確認作業を進めていく予定である。また、旧流行地域内でもほとんどの設問項目に高い正答率を示した、昭和町の公立中学校では、昭和町内に風土伝承館 杉浦醫院（山梨県の日本住血吸虫症の歴史について展示している）が昭和町により保存されて居り、小学校時代から、数度の見学授業を実施している等の理由で、高い正答率を示したものと考察出来る。今回の調査では1961年に山梨県により実施されたアンケート調査と比較して、本症に関する認知度は低下していた。

国際社会のグローバル化に伴い、特に開発途上国等への赴任や海外旅行者が増加するにつれ、海外での本症感染の可能性も高くなることが予想できる。

また外来動物が国内に持ち込まれている状況を考慮すると100%国内で発症が無いとは断言できない。本調査実施により山梨県内の中学生の本症に対する認知度を確認できた事に併せて、中学生の本症についての知識・意識を向上する契機になったと思われる。今後、数年毎に同様の調査を実施する事が出来れば、山梨県内の中学生以上の年齢の人々の本症に関する知識・意識の向上に資する事が出来るものと考察している。

まとめ

旧流行地域では、非流行地域に比べて本症の認知度は総じて高いと思われた。その中でも、最も濃厚流行地であった昭和町の公立中学校での認知度が本調査を実施した5校の中では最も高かった。これは昭和町に本症に関する記念館（風土伝承館 杉浦醫院）があり、地域住民の関心も高いためと思われた。しかし、昭和町の公立中学校においても、正しい知識を持っている割合は、10%以下であり、本症に関する知識・意識の風化が伺われる。寄生虫病対策は感染症対策の基本とも言われるが、本症の再流行の可能性が無いとは言えない為、今後も認知度を上げる活動が必要である。

謝辞

本調査にご協力を頂いた、山梨県昭和町立押原中学校、私立駿台甲府学園駿台甲府中学校、私立山梨学院大学附属中学校、私立山梨英和中学校、私立富士学苑中学校（以上調査実施順）の5校の教職員の方々並びに同中学校在学生の皆様に深甚なる感謝の意を表します。